
東方医療神

ミスターサー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方医療神

【Nコード】

N3175T

【作者名】

ミスターサー

【あらすじ】

起きた時、ショッカーみたいな奴等が俺の身体を弄くり、不老不死にしゃがった

ため息が出たね・・・東方医療神、始まり始まり

改造と記憶喪失

起きたら、仮面ライダーの悪の組織ショッカーみたいな奴等が目の前にいた

「おい！お前ら！何して！」

「ハッハッハ！我々の技術の糧になってもらう」

完全にショッカーじゃねえか！

そして麻酔をかけられ、眠らされた

気が付いたのは銃を持った人達が俺を囲んでいたこと

そして俺の手が赤く血に塗られていた、雨が降っていたせいかわ溜まり出来ており、顔を覗くと俺と思われる化け物が写っていた

「……………！！！！！！」

俺は叫んだ、何を言ったのは分からないが叫んで気絶した

再び目が覚めたのは病院のベッドだった

夢、だったのか分らない

けど、なんなんだ？なんか身体が重い

俺はベッドから降りて、コップに水を注いで飲む

あれ？俺は誰だ・・・名は？名は、なんだ？

俺が頭を強く掻き始めたら病室（？）のドアが開き、個性的な服を着た女性がいた

「・・・アンタは誰だ」

俺が問うと、女性は言った

「私は××、姓は八意よ」

「八意？^{やこころ}なら八意、俺は誰だ、俺は何をされたんだ？」

八意はこう言った

「貴方は・・・何者かは解らないわ」

空気が凍った

「そして貴方は人間じゃないわ、老いる事がない・・・だから人であつて人ではない者になつたわ」

「人であつて人ではない？意味がよく」

「・・・とりあえず寝なさい、寝起きで頭の整理出来ないかもしれないから」

確かにそうだな、そう言つと俺はベットの中に入り、再び眠つた

俺の名は――

あれから3日経った、過去の事は大体ボヤけるように思いだし、この世界観を知った

ここは俺の過去に居た世界ではなく別の世界、つまり平行世界パラレルワールドとい
うのにも気が付いた

文字が読めなかったからな・・・分かんよ、マジで

さて、俺は将棋をしている・・・隣の病室に居る住人とだ

「王手」

ちなみに住人は八十ぐらいのご老人、最近高血圧で入院だとか

「ハハハ、悪いですが王手返しと角取りです」

「なぬう！??」

「待ったは無し、よろしいですね？」

「ぬう、参ったのう」

「アハハ、これで六勝四敗ですね」

そして俺は駒を回収しケースに入れ、盤を折り畳み、立ち上がる

「ふうむ、そんなに負けてるのか・・・ワシは」

「アハハ・・・暇だったら、またやります?」

「ワシは今日、退院じゃぞ?」

「残念、せっかく仲良くなれたと思った矢先に」

「まあ・・・暇な時は見舞いに行くわい」

「ありがとうございます」

そして俺はご老人と別れ、部屋に戻ると八意が居た

「八意か、何ですか?」

「担当医が来ちゃ駄目なの?」

「いえ、そう言ったのでは・・・ところで精密検査の結果は?」

精密検査、不老になった理由を知りたい為に行つたのだ

「そうね、身体の臓器が3つ・・・人工物で造られて居たわ、心臓と肺よ

しかも永久停止しないぐらい、丈夫な奴・・・」

「つまり?死ぬのが無理に近いと?」

「そうね・・・ちなみにアイツ等はあの未完成な薬で貴方を改造したのが分かつたわ」

「未完成？薬？いったい何の事です？」

「不死の薬よ、本来なら不老不死の薬だったんだけど」

「不老不死、不死の薬？」

「ええ、つまり貴方は不完全な不老不死になったと言うことよ」

「不完全な不老不死・・・」

不完全だから首が堕ちたら死にますよね、やっぱり」

「あら、肯定するの？」

「医者のアンタが言うんだ、聞き入れるよ」

「そう、けど・・・丁寧語かタメ語か、どちらかにしてくれないかしら、慣れないわ」

「・・・と失礼、たまにタメ語に言ってしましまして」

「・・・ふうん」

「だって同い年に見えて」

「・・・私は今年で××よ」

「・・・へ？」

「名前を考えてきたわ」

「嘘だ、嘘に違いない・・・え・・・？いや本当？」

「もしもし」

「・・・嘘だ、ウソダンドコードン！」

メキヤ・・・（主人公を殴る音）

「がはぁぁあ！」

五分経ち

「戻った？」

「ええ、戻りました」

「そう」

「で、名前でしたか？名前はなんです？」

「そうね、実は貴方を勝手に私の弟にしたわ」

「へえ・・・え」

今、さらっと重大な事を言わなかったか！？

「それで名前は八意 ななくさ 七草よ」

「何故に七草！？」

「七草粥 ななくさがゆ を食べてたからよ」

「酷！？適当すぎる！！」

「戸籍もそれで決まってるわ」

「初めて貴女が悪魔に見えます！！」

拝啓、前の世界の両親よ・・・自分、昔の名を辞め、八意 七草と
名乗る事になりました
強制ですが・・・

医者として

二百年が経ち、俺は医者になっていた
ちなみに外科医だ・・・当初、俺が未熟者だった頃、吐き気が来たのは覚えてる

若かったんだねえ・・・うん

ちなみに姉さん、八意姉さんは外見は変わらない美しさだ

理由は能力らしい、確か名は忘れたが人の若さを保つ能力者が居て、貴族や有力者達、能力者にかけている

無論、俺にも・・・

俺の場合は能力が有るおかげで、若さを保ってもらっている

ちなみに俺の能力は人命救助に使える能力、『触れる事により病と傷を治す』と言う能力だ

「戦力には、ならないがな・・・」

俺はそう呟くと一人の看護婦が来る

「七草先生、お茶を淹れたのですが飲みますか？」

「おー、飲む飲む！」

俺は呼んだ看護婦の所に行き、テレビを付ける

『月面移住計画は順調に進んでいます！あと一週間で！』

「・・・」

「あ、移住計画のニュースですね、今の」

「うん」

月面移住計画・・・妖怪から人々を守る為に企画された物
妖怪、皆さんはご存知だと思われるが、妖怪は人の恐怖心で産まれ
る産物だ

過去、今、未来・・・

相変わらず人間の恐怖心は無くならない

そして王族は妖怪を恐れ、穢れた物として見る

それで月面移住計画をするらしい

「・・・が平和だ」

そして今日も平和に時は進む

「七草先生！急患です！！脈が不安定、脳波が乱れて！」

「はい、行きます！」

いや、やっぱり平和じゃないな・・・

平和になる前に医者はやっぱり時間が勝負だからな

「あー、疲れた」

時は進み、夜・・・八意邸

俺は三回連続で手術して集中力を使い、果てしなく眠い

俺は酒呑んで・・・寝る、そう思った瞬間、電話が鳴る

ピッ

「・・・八意です」

『久しぶりね、七草』

「ああ、久しぶり・・・××姉さんも元気そうだね」

『ああ・・・とは酷いわね、久しぶりに電話したのに』

「悪い・・・手術を連続でな・・・眠いんだ」

『あら、ごめんなさい・・・ニュースを見てほしいの』

「ニュース？」

俺はテレビをつけると月面移住計画のニュースがやっていた

「完成したんだ、予定よりも早く」

『ええ、予定よりもよ．．．』

「スゴいや、姉さんは」

『ありがとう』

「でも姉さん、病院の患者は連れていけるかい？」

『もちろんよ』

「良かった．．．」

『ええ．．．身体の調子は？』

「身体の半分を締めてる人工臓器は正常してる．．．だから大丈夫、心配ないよ」

『そう』

「．．．」

『．．．じゃ、切るわね』

「あ、待ってくれ．．．」

『何？』

「姉さんに聞きたいんだけど・・・俺は兵器として改造されたのかな？」

『・・・何故、言い切れるの？』

「夢に出てくるんだよ、硬くて丈夫な赤の皮膚、腕力と脚力が強そうなたさが・・・
鬼のような角も額に有った」

『貴方は・・・疲れてるのよ』

「・・・そういう事にしよう」

そして電話を切り、洗面所に向かい、歯を磨き、鏡に向かい歯垢しこうが無い確認していると赤い化粧物が俺の背後に写っていた

「ッ!？」

俺は後ろを向くと、何も居なかった

有ったのは、つけっぱなしのテレビだけだった

医者、秘密を破られる（前書き）

クレトス様作品

『東方転生旅人録』

とコラボしました

許可をしていただき、ありがとうございます！（〇〇〇）
ッ

医者、秘密を破られる

「なんてこつた・・・」

俺は今、啞然としている・・・

理由は妖怪の宣戦布告のニュースを見たからだ

だが、月に移住する計画を急に進めているニュースも言っている

「・・・姉さんの所に行こう、人類は二日後、月に移住するんだから」

俺は姉さんが居る場所に歩いて行つた

え、仕事？休みだよ

「「」用件は？」

「八意××さんに会いたい、弟が来た事を知らせたら許可を貰えると思う」

「少々、お待ち下さい」

場所は、皇居

姉さんは、ここに住みながら働いている

俺は何度か訪ね、お偉いさんを治療したことが有る
急性胃腸炎とか、そこら辺を・・・

「許可が下りました、どうぞ」

「ありがとうございます」

俺は警備員に案内され、俺は一室に来た

「失礼します、八意七草でございます」

「入りなさい」

そして入ると男性が手足を縛られ、叫べないように布で口塞ぎされていた

「姉さん、これは？」

「ん、私の彼氏」

「む！？むがー！！」

「彼、首がもげそうなぐらいの勢いで首を横に振ってるよ」

「彼はシャイだから、恥ずかしがり屋だから」

「いや、俺は違うと思う」

だってさ、俺の方を見て、助けてくれ的な瞳で見てくるんです

「姉さん、とりあえず彼を逃がし」「いやよ」・・・」

「だって夫が逃げ「姉さん、未婚だったよね？」五月蠅い、去勢にするわよ」

「怖い！？」

姉さん、俺に会わない間に何が起きたんだ！？

「姉さん、とりあえず彼の事は置いて、移住計画だけど」

「ええ、彼が隊長よ」

「防衛戦の隊長が今、縛ってる奴がそうなの！？」

「yes！」

「無駄に発音良い！？

・・・あれ、居ないよ」

「え？」

俺は、ちらりと目を捕まってる男を見たら誰も居なかった

「なっ！？何処に！！しーん！！真！」

姉さんは、ドタドタと駆けながら部屋から出て行き、大声で兵士達に命令している

「・・・姉さん、変わったなあ」

そして再び、捕らえられていた男が居た台を調べると一部の台の影

が少しだけ盛り上がっていたのに気付いた

「・・・居るんでしょ、隊長さん」

「むが・・・」

ビュン、と音がして再び現れた隊長さん

「むが、むが？」

「助けてくれないか？ですね」

「むが」

隊長は肯定の意味で頷く

「ま、良いですよ・・・鍵は姉さんからスリました」

「・・・むがむが？」

「医者なんで手先が器用なんで簡単です」

俺は次々と拘束具の鍵を解除していく

「最後つと」

ガチャン・・・

男は腕の拘束具が外れたと同時に口を塞いでいた布を取った

「あゝ、助かったぜ・・・サンキュー」

「いえ、姉さんが悪い事をしてしまったので・・・
薬とか射たれてませんよね？」

「ああ、ギリギリセーフだ・・・
とりあえず俺は真、お前は？」

「七草です、先程の・・・貴方を軟禁していた女性の義理姉弟の弟
です」

「お前、アイツの・・・えーりんの弟なのか？」

「えーりん、ああ××姉さんの事ですね」

「よく、そう呼べるな？難しくないか？」

「慣れましたよ、とにかく出ませんか？
隠れる所ぐらい提供しますよ・・・
姉さんには悪いですが」

「いやゝ助かった・・・改造される前だったから助かったぜ」

「まあ、とりあえず行きましょう
消える事は、また出来ますか？」

「ああ、出来る・・・」

フォンと音がすると真さんは消えた

「では後から来てください」

「オッケー」

八意亭

「いやゝ、大変でしたね・・・」

「ああ・・・えーりんの奴、毎回ヤンデレ化するんだぜ?」

「毎回とは、真さん・・・貴方はナニシタンデス?」

「うお!? 途中からカタカナ変換するなよ!!! 堕天使達を思い出す
!」

「・・・堕天使? 分かりませんが、一体何を?」

「とある姫の唇を奪った」

「おい!!!?」

「悪気はなかった、反省していない」

「反省しろ！！ヤバイよ・・・この人」

「いやあ、それほどでも」

「真さん、誉めてない・・・誉めてない」

今、俺達は酒を飲みながら話している
料理は俺が作ったのをツマミにしている

「しかし料理美味いな・・・」

「ありがとうございます」

「・・・ところで話しは変わるが、お前は何者？」

「・・・普通の人間ですよ」

「いや、違うな・・・」

お前には何か人間とは違う気配が有る・・・」

「・・・お前、何者だ？」

「傭兵」

「・・・傭兵ね、傭兵にしては医学を学んでるのか？」

「・・・勘だな」

「勘か・・・」

「ま、俺の知り合いにクローン人間が居てな・・・ソイツと同じ感覚が有るからかな」

「・・・クローン人間か、だが俺はクローンではないよ」

「似たような者だろ・・・今、思い出したぜ
改造人間『八意 七草』」

「・・・なんだ、知ってるのか？」

「ああ、否定しないんだな・・・」

「もう地上に居られるのは2日しかない、否定するのは疲れた」

「・・・そうか」

「ああ・・・」

「・・・辛くないか？」

「慣れれば辛くない・・・」

「もう少し早く出会えれば、友達になれたのかも・・・しれない・・・」

「で、どうする

この事をえーりんに伝えるか？」

「面倒だからパス」

俺はツマミを食べ、温ぬるくなったビールを飲み干した

明日から・・・妖怪との戦争が始まるのか・・・

医者は鬼か？劫火の中で・・・

三人称視点

民は、逃げていた

妖怪達が朝方から強襲を仕掛けてきたのだ・・・、彼も・・・いや、七草は違った

七草は、妖怪が一人の人間の頭を身体から引き千切り、ポンポンと投げて遊んでいるのを見ていた

しかし、七草は笑っていた

笑っている狂った人間のように笑っている

前にある風景を見ている

周辺は、悲鳴や赤ん坊の泣き声・・・人が焼ける匂い、紙が燃える匂い、建物が燃える匂い

そして地には、鉄の匂いがする赤い血がある

すると一匹の鬼みたいなヤツが七草に気が付き、近寄ってきた

「・・・なんや、お前は？」

なんで、笑ってるんや？」

鬼は七草に訪ねた

「解らない、けど何か心の奥から何か来るんだ」

七草は鬼が来たことを気にしないで返答する

「変なヤツや、狂ったかいな？」

「ハッハッ、狂った？たしかに狂ったかもしれないな・・・！
そーいう、あんたは俺に話して大丈夫なのか？」

「ああ？大丈夫や、それに同種が目の前で死んでるってのに笑ってる方が変や」

「フフ、違いない」

するとロケットが空を飛び出して、宇宙に消えていくのが七草は見え
えた

「あー、あ・・・
置いて行きやがった」

「・・・」

「なあ、鬼さん？」

「なんや」

「いや、俺をーしてくれ」

「・・・、何故？」

「俺は、人間であって人間じゃない
改造・・・つまり身体を作り物になってるんだ」

「・・・なんか、悲惨や」

「そうかね」

「なあ、うちの医者にならへんか？」

「・・・え？」

「いや医者にならへんか？」

「なんで」

「『なんで』って、お前さんは医者やろ？
だつたら妖怪の医者にならへんか？」

人間じゃないなら歓迎するで」

「・・・妖怪の医者になるか、良いかもしれない」

「決まりか？」

「ああ、決まりだ・・・良いぜ
妖怪の医者になってやる・・・」

「よっしゃ、じゃあ行くで」

「何処に？」

「山に」

「・・・山か」

「山や」

「ま、良いか・・・そういえば、お前の名前聞いてないな」

「ワイ？ワイは、鬼の『戒^{かい}』や
よろしくな」

「ああ、よろしく・・・」

俺は、七草・・・八意 七草だ」

七草は戒と言う、鬼の肩に乗って山の中に入って行った

そして鬼と元人間は、残虐な声や悲鳴をバツクにしながら居なくな
った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3175t/>

東方医療神

2011年11月21日10時59分発行